

つるんしゃん

私の生まれたところは伊万里釜で、育ったところは日の浦である。私の故郷福島は五十年足らずのうちに大きく変わったし、今もなお変貌を続けている。

私は最近、島の道路を車に乗せられて走っている時や、ひとりで歩いているような時に、昔この辺は…といやに古いことを思い出すことが多い。昔を思い出させるものが、埋められたり、こわされているのを見ると、はっと思うことがある。新しいものが次々と出来る故郷は楽しみであるが、思いがけないものがいつまでも残されているのを見ると、忘れていた遠く去った幼い頃の映像が甦ってくる。「暗くなるまで遊んでいると、人さらいが来るよ」と大人たちはよくそう言ったものだ。サーカスの少年少女たちは、人さらいにさらわれた可哀想な子供たちだとよく聞かされた。当時は食うに困れば自分の娘でも売る時代であったから、他人の娘をさらって売り飛ばすものがあると聞いても不思議ではなかった。

義務教育を終えると、口べらし奉公のため、親元を離れ、他人の飯を食う。これはかつての日本社会、特に底辺にあつては見なれた情景の一つであつたに過ぎない。貧しい親は、子に犠牲を強いる以外に生き

る道はなかつたのである。

いつの頃からだろうか、海を見てみると妙に私は心が落ち着いた。過ぎし日々を振り返る時、必ずと言っていいほど海の想い出が浮かび上がってくる。学校へ通う日の浦の坂道は長いといっても百米あるかなしぐらいだったが、私はこの坂の上から見る日の浦の風景が好きだった。

子供のころ、日の浦の炭坑につるんしゃんという大変な餓鬼大将がいて、私が小学校へ行く前から勇名を馳せていた。私よりどのくらい年上だったか覚えていないが、彼は上級のお山の大將たちを追い抜いて君臨していた。

日の浦の坂道を歩くと私の耳には今でも坂の上からつるんしゃんの声が自分を呼んでいるような気がする。かつて、この坂の上から彼に呼ばれたら、どんなことがあっても返事をし駆けつけるのが何よりも大切な心得だった。親や先生の言うことをきかない仲間たちも彼の命令には従ったものである。

私に通っていた小学校では宿題がかなりあった。それを言われたとおりにやっこない、かなりひどい目にあつた。教室に立たされるだけでなく、叩かれたし、よく罰当番をさせられた。こういう教育の方法にたいして、私は今でも別に意見を持っていないが、特にひどいとも思っていない。

あるとき宿題をしてこなかった友達に「頭が痛かったです」と言った。すると先生は叱らなかつた。それから宿題をしてこなかつた者が黙って叱られたり立たされたりされては損だと思ひ、いろいろ言い訳を言ってみることが流行した。腹が痛かつたとか、ひどいものになると叔父さんや叔母さんが死んだとか、本当か嘘か私どもにもわからなくなつた。そんなある日、つるんしゃんの集合の号令が下つた。「お前たち、

くどくど言い訳をするのは、男らしゅうなかぞ、叩かれていつちよけ、いいか」と毅然とした態度で言った。それから言い訳はみつともないと思うようになり誰も言わなくなった。

当時は先生から叩かれても、生徒たちは当然の措置と心得ていて、家に帰っても両親に言いつけたりはしなかった。当時の大人たちは、食べていくために忙しく子供の世界まで首を突っ込む暇などはなかった。その頃の子供の世界は殴ったり殴られたりなどというトラブルは日常茶飯事で、教師も父兄も今のようないちいち騒がなかった。もし子供の喧嘩に親が何か言ったら「子供の喧嘩に親が出た」と評判になり、みんなの笑いものになったものである。

川の向こう側の炭鉱の納屋にケンちゃんという年上の子がいた。彼は幼い時、疫痢にかかり、高熱を發したあげく脳膜炎を併發して、精薄児となっていた。年を加えるにつれて知能の遅れが目立って行った。学校に行くこともなく、よく近所の赤ん坊を背に負い、子守をして、にぎり飯などをもらっていた。彼はにぎり飯を食べる時、一口食べては眺め、ゆっくり味わいながら食べた。そのケンちゃんの小母しゃん(母)には困ったくせがあった。日の浦はガラ土だから、いたずら仲間たちの顔は真っ黒な泥をよくくつつけていた。そんな私たちを見るとつかまえて、あねさんかぶりにしている手拭いはずして、自分の唾をつけて濡らし、顔をゴシゴシと丹念に掃除するのだった。逃げようと思うのだが出会うとなぜか諦めたような気分になってしまい、小母しゃんのするがままにしていた。

ある日ケンちゃんが真っ赤に熟した山桃の實の着いた見事な枝を、炭鉱の二人の若い衆に取り上げられた。誰かがつるんしゃんに報告したらしく、駆けつけた彼が「あんちゃん、それは返してくれんね」と静

かに言った。二人の若い衆はせせら笑った。小馬鹿にしたような目つきだった。つるんしゃんの目が濡れたようにギラツと光った。彼は下駄を脱ぐといきなり「ギャーツ」と怪鳥のような叫び声を発し、相手の喉元にすさまじい飛びけりを入れた。呆気にとられた一人にも激しい頭突きを見舞った。にぶい音がして相手はもんどり打って倒れた。それはあつという間の出来事であった。あまりの凄まじさに見ていた私たちは体じゅうが震えつづけ、握りしめた手が汗ばんで指の間を濡らしていた。二人の若者はふらつきながらやつと起き上がり、すごすごと退散した。彼は腰バンドを締め直すとパンパンとズボンを叩き、青ざめた顔をして、小刻みに震えていたケンちゃんに山桃を渡した。

「ケンが死んだぞー」と子供たちの騒ぐ声が聞こえた。私は外に飛び出した。大人たちの話では高い木から落ちた小鳥の雛を可哀想かと言って巢に戻してやった後、枝と共に落ち、間もなく息を引き取ったということであつた。雷鳴のとどろく日の出来事だったと記憶している。

ケンちゃんの葬儀は寂しいものだった。大人が五人ぐらいしかいなかった。つるんしゃんは葬列の後からついて行った。土人墓から帰った彼は子供たちを集め、目の前で大きな孟宗の竹筒を鉋で割った。中から一銭・五銭・拾銭が驚くほど出て来た。その銭はつるんしゃんがみんなを使って稼いだ野球場の草取賃、お稲荷さんや、祠のお寶銭箱から黙って失敬したもの、正月の十四日にもぐら打ちをして貰った銭などであつた。古びた大きな風呂敷に銭を包み、私たちを引き連れてケンちゃんの家へ向かった。

煤けた障子にうす暗い電灯の明りがにじんでいる台所の板の間に包みをドスンと置いた。「小母しゃん、元氣ば出さんばたい、これでケンのために何かしてやってくれんな」。呆気にとられたような顔をした小

母しゃんが、しばらくしてから大声で泣き出した。「あんたが、あんたがケンをかばってくれたことは決して忘れんばい」そう言って又子供のよう泣いた。

「炭鉾の子供とあんまり遊ばんごとせんばばい」そういう大人たちの声を聞いても、くちびるを噛み、じつと目を伏せて耐えていたつるんしゃんだったが、この時ばかりは眼から涙が溢れ、頬を伝い落ちていた。初めて見る彼の涙であった。つるんしゃんの家は貧しかったから銭は彼が全部使ったものと思っていた。私たちは、なんともいいような強い衝撃を受けた。まだ人の死の悲しみがどんなものか、わかる年齢ではなかったが、小鳥の雛と命を取り替えたケンちゃんが多まらなく哀れであった。そしてつるんしゃんの弱者をいたわる心情の強さに心打たれた日でもあった。

潮騒の音がかすかに聞こえる夕べの砂浜に出て見ると、昏れかけてゆく夕光を浴びて、岬の突端にたえずんでいるつるんしゃんの姿があった。突如、海に向かって「ケン」と絞るような声で彼は叫んだ。

この日から、ほどなく彼の家はどこかへ転居して去り、餓鬼大将つるんしゃんの姿を再び見ることはなかった。昭和初期、日の浦炭鉾がさびれていったころの想い出のひとつまでである。

